

# 医療関係者・技術者ら220人が意見交換 第14回日本中性子捕捉療法学会学術大会

第14回日本中性子捕捉療法学会学術大会は9月29・30の両日、郡山市のビューホテルアネックスで開かれ、医療関係者や物理学の技術者ら約220人が加速器による実臨床に向けての研究成果を発表し、意見を交換し合いました。

昨年初めから南東北BNC研究センターで世界の病院で初めてのBNCによる悪性脳腫瘍や進行頭頸部がんのII相試験が行われていることか

ら今回は「加速器BNCの実臨床に向けての諸問題」をテーマに同市で開かれました。

初日は午前9時から開会式が行われ、大会長の高井良尋南東北BNC研究センター長のあいさつ、渡邊一夫脳神経疾



開会あいさつする高井大会長

患研究所理事長の歓迎のことばに続き物理学や薬学・化学面から20演題が発表されました。小野公二京都大原子炉実験所客員教授が「CBEファクターを考える」と題して教育講演、福田寛東北医科薬科大教授が「癌のBNCの発展に貢献したわが国の研究を振り返って」と題して特別講演しました。

また京都大原子炉研究所と南東北BNC研究センター

## 鳥越さんが、がん手術体験語る 医用原子力技術研究振興財団の市民公開講座

医用原子力技術研究振興財団の第14回市民公開講座は、9月30日(土)午後1時から郡山



手術体験を語る鳥越さん



活発に意見交換された学術大会

の研究者による「BNCによる全身被曝を考える」をテーマにシンポジウムが行われた

ビューホテルアネックスで開かれ、300人を超す市民たちがジャーナリスト・鳥越俊太郎さ



BNCTを話す廣瀬部長



陽子線治療を話す村上センター長

日本中性子捕捉療法学会学術大会に合せて開かれた講座。同財団の辻井博彦副理事長があいさつ、高井良尋南東北BNC

ほか15題のポスター研究も展示され、関心を集めていました。夕方から懇親会が開かれ、参加者たちは杯を交わしながら談笑、地元の郡山うねめ太鼓保存会小若組の勇壮な太鼓、南国ムードあふれるえみフランスクルールのフラダンスを楽しんでいました。

2日目は16の一般演題発表をはじめ「実臨床に向けた諸課題」のシンポジウムなどが行われ、医師や放射線技師、看護師が今後の課題について意見を交わしました。15回大会は来年9月初め札幌市、16回大会は31年に京都市で開かれます。

んの講演はじめ、南東北グループが挑戦する世界最先端の放射線治療などを学びました。

研究センター長が歓迎の言葉を述べた後、廣瀬勝己同センター診療部長が「ホウ素中性子捕捉療法が拓く新しいがん治療の可能性について」、村上昌雄南東北がん陽子線治療センター長が「陽子線治療でどのような病気が治るのですか」と題して講演しました。廣瀬部長は、正常細胞へのダメージを最小限に抑えるホウ素中性子捕捉療法を分かりやすく解説、昨年から世界の病院で初めて試験中で順調に進んでいることなどを説明。村上センター長はブラックピークの活用でがんを集中して照射でき、今後更に多くの疾患にも保険診療科が進むと期待、切れないがんも治せる治療であるーなどと話しました。

ついでサンデー毎日編集長やテレビキャスターを務めた鳥越さんが「がんと共に生きる」と題し講演。ステージ4の大腸がんから肺や肝臓などへ転移、4回の手術体験を披露しました。がんは時間との勝負。早く見つけ早く治療するべきだ。放射線治療が進んでいるので大いに期待している。セカンドオピニオンもあるので手術方法などもよく話し合った方がいい。医者言いなりにするのはなく、自分なりにいい方法を求めた方がいいーなどとアドバイスしました。